

要 約

1990年代後半以降の開発や開発協力の分野における大きな変化の一つとして、「権利」という概念が注目されるようになり、「権利の実現」を開発の目標として掲げるアプローチが浸透してきたことが挙げられる。「権利をよりどころにするアプローチ」あるいは「権利に基づくアプローチ」(Rights-Based Approach)と呼ばれるこのアプローチは、従来の開発や開発協力が、ニーズの把握を重視し、ニーズに適切に応えることを目的として様々な支援を提供してきた歴史をふりかえるなら、開発、とりわけ開発支援の進め方に大きな変化を促す考え方である。

「権利をよりどころにするアプローチ」は、一人一人の権利の実現に焦点をあてるという意味で、参加型開発という概念よりもはるかに明確に、地域の多様性に目を向け、地域のなかで弱い立場におかれてきた人々の声や意思を他のグループの人々と同様に重要なものと考え、取り組みを促すことができる考えである。その意味で、ジェンダーの課題にとっても重要な意義を持つアプローチである。「権利をよりどころにするアプローチ」は、女性、とりわけ農村部に住み、教育を受ける機会が限られていることも多い女性の状況を改善するのに有効な働きをしているのだろうか。「文化」や「伝統」を理由とする反発や抵抗はあるのか。あるとすれば、どのような対応が効果的なのだろうか。同アプローチが採用されるようになってから、約10年が経過するなかで、ジェンダーの観点から同アプローチの意義と課題を検証することを目的として、本研究は実施された。

スリランカとインドのNGOの協力を得ておこなった調査からは、権利の実現を目標に掲げて活動してきた歴史が長い、インドのマスムのようなNGOでは、権利理解を促すために時間をかけた丁寧なプロセスがとられていることが確認できた。マスムでは、健康の問題を切り口にして、女性たちに自分の身体は自分のものであるという理解を促し、さらに、自分の身体と健康は自分で管理する必要があるという意識を育むことによって、健康を守ることが自分の権利であることを認識するというプロセスがとられている。権利を「学ぶ」というよりも、女性自身の具体的な経験を通じた、権利を「感じる」プロセスにより、権利理解への導入がおこなわれている。

権利について学び、権利の実現を目標に活動してきたマスムワーカーの女性たちには、自尊感情の向上、自信、自分と家族への責任感、一人ではないという意識、「伝統」や「慣習」に盲目的に従わない強さ、「伝統」や「文化」の名の下に内面化された差別への気づき、責任を果たすべき組織に権利の実現を求める必要性の認識等、エンパワメントの主要な要素ともいえる変化が生まれている。周囲の人々と共に、地域や社会を変えるために行動を起こそうという意識も明確である。一方、権利への取り組みの歴史が浅い、スリランカのNGOでは、こうした意識はまだ充分には育っていなかった。

両国での調査結果を踏まえ、「権利をよりどころにするアプローチ」が、女性のエン

パワメントに貢献するための留意点として、以下の諸点を指摘したい。

①実際に支援をおこなうワーカーの権利理解の質と深さ

権利の実現を目指す取り組みの成否には、現場レベルのワーカーの働きかけ方が大きな影響を及ぼす。従って、ワーカーが、どれくらい具体的に権利を理解し、自らの経験と関連づけながら理解を内面化しているかが問題になる。ジェンダー関連の支援をおこなう場合には、「文化」や「伝統」との軋轢が起こりやすく、それへの対応を余儀なくされる可能性もあるが、その際にも、実際に支援の場にいるワーカーたちが、どれだけ、自分たちの言葉で権利を説明し、周囲を説得できるかが重要なポイントになるだろう。

②丁寧なプロセスを通じた女性たちへの権利の浸透

日常生活に即した課題として、「感じる」ことにより権利理解が促されているマスの取り組みには学ぶところが多い。抽象的な「重要な」概念として理解されがちな権利を、実体験のなかで納得できる概念として丁寧に伝えている。このようなプロセスを通じた権利理解により、権利が、女性一人一人にとって身近で重要な課題であることが理解しやすくなると思われる。

③権利の実現に結びつけることを視野に入れたニーズへの対応

今回の調査では、スリランカ、インドの両 NGO とも、権利の実現を目指した支援を実施する際に、まずは緊急かつ具体的なニーズへの対応から始めていることが理解できた。注意しなければいけないのは、ニーズへの対応をどのように権利理解に結びつけるかという視点が、どれくらい組織、そしてワーカーに理解されているかという点だろう。それが不十分であれば、従来のアプローチと変わらないアプローチになってしまう。権利をよりどころにするアプローチという観点からは、ニーズへの対応を、どのように権利の理解と実現に結びつけるかが何より重要である。

④「伝統」や「文化」を理由とする抵抗への適切な対処

権利を理解し、権利の実現を求めて行動するようになった女性たちに対しては、夫や家族あるいは地域からの反発や抵抗が起こっている。こうした抵抗に対しては、粘り強くコミュニケーションをはかり、交渉を繰り返していくことの重要性が指摘された。権力関係の上位にあり、従って権利をよりどころにするアプローチの導入を脅威と感知することが予想される人たちに対して、説得力のある方法で丁寧にコミュニケーションをはかり、交渉する技術を女性たちに伝えることも必要である。

興味深い点として指摘できるのは、前述のニーズへの対応が、女性の困難を早急に軽減するという点で重要であるだけでなく、男性による女性への反発を軽減する要因にもなりうるという点である。調査に協力してくれた 3NGO とも、女性による家族や世帯

への貢献が増せば、夫や他の家族からの女性に対する認識が高まり、女性の権利についての理解を促進しやすくなると指摘している。

「権利をよりどころにするアプローチ」は、人々の間に存在する不平等な力関係を平等な力関係に変革していくことを目指すアプローチとして、エンパワメントそのものと呼ぶことができるプロセスと状態をつくり出すアプローチであり、その観点から、ジェンダーの課題にとっても重要な意味を持つアプローチである。そして、日本におけるジェンダーの課題を考えると、同アプローチの意義は大きいと思われる。その意味で、同アプローチの日本への浸透に際しては、本研究で明らかになったスリランカやインドの経験から学ぶことができる点が多い。

権利をよりどころにするアプローチの今後の展開については、特にジェンダーの問題との関連では、前進、後退、忘却の三者がせめぎあいながら進んでいくのではないだろうか。マサムが地域で起こしている動きのような前進もあるものの、ネパールの NGO で起こったワーカーの殺人といった後退も、現実には存在する。開発の世界が、次々に新しい概念を導入し、レトリックを駆使して消費してきた業界だということを考えると、国際機関や NGO が、結果的に忘却という状況に退却してしまう可能性も否定できない。現時点では、この三者がせめぎあいながら、前進と言える経験が積み重なり、可能性が少しずつ広がっていくことに信頼を置きたい。そして、国境を越えたトランスナショナルな動きのなかで、「途上国」の女性を支援するためのアプローチとしてではなくて、日本に住む私たちにとっても重要なアプローチであることを強調したい。